

常願寺川扇頂部川除の変遷と佐々堤

貴堂 巖¹

¹正会員 (株)ケイエステック (〒930-0293 富山県中新川郡立山町鉾木220)

E-mail:kido9126@pc.ctt.ne.jp

扇状地富山平野中央部を流れる常願寺川は、流路延長 56km と短い、立山連峰の標高 2,662m の北ノ俣岳を源流とし、河口からほぼ 18km 地点上流が扇頂部となる。そして、江戸時代ここから約 3km 下流の馬瀬口にかけては、大雨のたびに氾濫を繰り返した。本稿は、この地域の川除の変遷を古文書と古絵図から辿るものである。また、戦国時代の武将佐々成政が、この馬瀬口に石堤を築いたと伝承されているが、明治時代のデ・レイケ指導の常願寺川河身改修に伴う常西合口用水の開鑿時に、その石堤が発見されたと伝えられる。この石堤は「佐々堤」と呼ばれ、近年、高さが 10m、敷幅 40～45m、天端幅が 30m の規模と語られるようになり、これが通説¹⁾となったので、この妥当性を併せて考察する。

Key Words : Jouganji River, Maseguchi, Sattusa-tei, Sttuasa-Narimasa, Open levees

1. はじめに

(1) 研究の目的

常願寺川が平野部に入る富山市中番字草履田付近から下流の源左衛門、馬瀬口にかけては、築堤と破堤の歴史を繰り返してきた。本稿は、この川の江戸時代の川除の変遷を明らかにするものである。

また、戦国時代の武将佐々成政が馬瀬口に造った石堤を、明治期にデ・レイケの指導で造られた常西合口用水の底部に見ることが出来ると言われている。

しかし、江戸時代にも石堤を造ったとする文書と絵図が残っている。そこで、江戸時代の川除との関連を明らかにし、現存する石堤の頂部が「佐々堤」の遺構であり、敷幅 45m、天端幅 30m、高さが 10m とされる通説を検証する。

(2) 既往の研究

常願寺川の川除に関する研究としては、大熊²⁾、寺村・大熊³⁾、安達・大塚・北浦⁴⁾の研究がある。しかし、これら論考はこの川の川除の規模には触れられていない。また、「佐々堤」については歴史書に取り上げられることは多いが、工学的な視点から考察されることは少ない。田邊・越野⁵⁾は古絵図と現在の地形図を照合することにより「佐々堤」とされる位置を古絵図上で特定することを試みている。しかし、この論考は常西合口用水底部石張を「佐々堤」の天端とする説に基づくものである。

2. 江戸時代前の川除

(1) 築堤の記録と佐々成政の石堤伝説

常願寺川の氾濫は、806(大同元)年から記録され

ている。川除が何時から造られたかは不明であるが、1254(建長6)年夏、源五郎前にて破堤との記録がある⁶⁾。1890(明治23)年に編纂された『前田氏家乗』⁷⁾には、1783(天明3)年の常願寺川の洪水を記述し、「古昔成政が此の堤(馬瀬口の堤)を築く親らその場に臨み力を盡さしめし所にして石堤今猶存在す敷二五間あり災害の策至れり…同年(天明3年)秋又諸川洪水常願寺川漲溢馬瀬口川除潰壊…」と成政の築堤に触れているが、典拠史料は不明である。

織田信長の家臣佐々成政は、越中で越後の上杉景勝勢と戦っていた神保長住の助勢を命ぜられた。『富山市史』によれば、1580(天正8)年秋、成政は越中に入ったが、連日の大雨が降り続き常願寺川が氾濫し、富山城を浸し、富山町の家屋を漂流させた。成政はこれを愁い、馬を馬瀬口に進め、巨岩に自分の名を刻み、これを川底に埋め、その上に敷25間(45m)の堅固な石堤を築き、新たに分派した支川を鼬川と名付けたと記している⁸⁾。この説によれば、「石出し(水制)」により河岸の防護を試みたか、洗堰により鼬川への流れを制御したとも考えられる。そして、この堤が常願寺川筋堤防の起源とされる⁹⁾。成政の築堤に関しては、『富山市史』編纂に際しての資料綴り「富山市史調査材料」¹⁰⁾に市史の一部と合致する文(典拠史料不明)、「富山市史編纂顛末」¹¹⁾には、『前田氏家乗』の敷幅に関わる文が記述されている。

(2) 江戸時代の川除の埋没と佐々堤の発見

1858(安政5)年2月、飛騨・越中を襲った飛越大地震により大鷲山と小鷲山が崩壊し、常願寺川支流湯川谷を埋めた。翌3月にこれが決壊して土石流が下流右岸を襲い、さらに4月には、前回に倍する土石を含んだ洪水が発生し、左岸の川除と村々を埋め

つくした。口碑伝承ではあるが、扇頂部上滝村立山橋付近では20mも河床が上昇した¹²⁾。鳶崩れに起因する土砂を鳶泥と称しているが、近年の藤井・中村等の研究によれば、堆積した鳶泥の厚さを調べたボーリング結果とこの値は近似しているという¹³⁾。

1891(明治24)年から、常願寺川河身改修工事と左岸用水の合口化工事が始まり、用水の開鑿時、中番地区と新たに造られた太田用水取入れ口の底部で石堤が見つかり、「佐々堤」の天端とされた¹⁴⁾。そして、下流の「済民堤」と呼ばれる堤の下にも石堤があり、高さ10m、敷幅45m、天端幅30m、長さ150mの霞堤が約2kmの範囲にわたり成政により造られたと語られ、これが通説となった^{15) 16)}。図-1は「佐々堤」があったとされる3か所の位置を示す。

通説の「佐々堤」の体積を計算すると、連続堤としても750,000m³(125,000坪、1坪=6立方尺=6m³)となる。江戸時代後期に書かれた『地方凡例録』¹⁷⁾や『算法地方大成』¹⁸⁾によれば、1町(60間=109m)離れた場所から石を採取して1日に1坪運ぶのには、石拾い1人、石持、運送、仕立作業に3人の計4人が必要とある。これに拠れば、延べ50万人の人夫が必要となる。越中に入ったばかりで上杉勢と対峙している成政にとっては容易な動員数とは考えられず、通説の「佐々堤」の規模と範囲は過大と考えられる。

3. 江戸時代の十村史料による川除の検証

(1) 検証に適用する十村史料

十村とは、他藩の大庄屋に相当する加賀藩・富山藩特有の職名で、1604(慶長9)年に創始されたといわれ、創始時に十力村内外を支配したための名称である。十村の任務は所管の農民を支配し、巡視して、高方・収納方など一切の農事を監督した。

ここでは、富山藩の十村である越中国新川郡萩原村(現、富山市萩原)の高堂家と、越中国婦負郡宮尾村(現、富山市宮尾)の内山家の史料を参考とする。なお、堤の各部の用語は参考とした史料の呼称を使用したため、混用している。(例えば、天端-頭-馬踏、敷-舗-底-根等)

(2) 江戸時代の破堤の記録

1580年の佐々成政の築堤以降、扇頂部左岸の草履田、源左衛門、馬瀬口の各川除は洪水により破堤

表-1 1580(天正11)年以降1858(安政5)年迄の上滝-馬瀬口間破堤の記録

年号	川除名	草履田	源左衛門	馬瀬口
1583(天正11)		押切	押切	
1680(延宝8)				切込
1701(元禄14)		切れる	切れる	破壊
1707(宝永4)				切れる
1747(延享4)			切込	
1783(天明3)		破潰	破潰	潰壊2回
1789(寛政1)		押切	押切	筒口押切

参考文献 20), 21) より作成

を繰り返している。その記録の主なものを表-1に示す。各川除は4~6回のダメージを受けている。

1701年の洪水では馬瀬口堤が破堤し、富山町に害が及び草履田、源左衛門川除については、大石を以て修築された²²⁾。1789(寛政1)年の洪水による川除の復旧においても、十村高堂家の文書「常願寺川縁加賀・富山両藩境川除普請仕法目録など覚」1789年閏6月²³⁾(以下「仕法目録」と呼ぶ)によれば、草履田、源左衛門川除は大石を張付けた構造となっている。

(3) 江戸時代の入札史料に見られる川除の規模

1789年閏6月、常願寺川は3度にわたり出水した。

「仕法目録」は、破壊した常願寺川左岸上滝の加賀藩と富山藩の境、三ヶ村用水から下流の下馬瀬口前、八十間川除迄の築堤と岸崩れ等、計13か所の復旧に関わる入札の記録である。その一部を写真-1に示す。このうち、岸崩れの補修普請を除いた築堤に関する仕法を表-2に示す。「仕法目録」によれば、すべての川除の仕様は「下石目形三斗目已上、上羽取石五斗目已上、大石を以て、羽取出来候」と規定された石積の川除である。1斗=181、石の比重を2.4と仮定すると、体積が541(重さ130kg)以上の石を積み上げ、901(220kg)以上の大石で表面を覆った川除である。また、川除はすべて「丸川除」となっている。『地方凡例録』によれば、施工が難しく費用がかかるが、馬踏は雨水を流すため少し丸みをつけ、安全性を高めるため法面を膨らませた「蒲鉾型」を薦めている²⁴⁾。従って「丸川除」はこのような形を指していると思われる。上滝から馬瀬口迄の川除の配置イメージを図-2に示す。

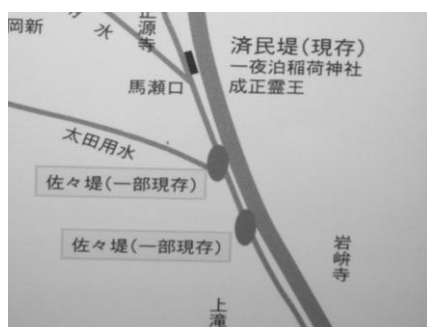


図-1 佐々堤の遺構(文献19)による)

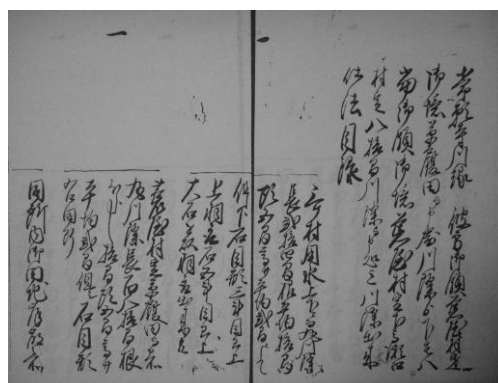


写真-1 川除普請仕法目録(富山県公文書館蔵)

表-2 藩境三ヶ村用水上下丸川除より下流、八十間川除までの川除の仕法(1789年)

目録の川除名	長さ	根	頭	高さ
三ヶ村用水上下丸川除	24k(43m)	平均 10k(18m)	5k(9m)	平均 2k(3.6m)
草履田丸川除	180k(324m)	ならし 10k	5k(9m)	平均 2k(3.6m)
草履田下も宮上丸川除	64k(115m)	ならし 10k	4k(7.2m)	平均 2.5k(4.5m)
上馬瀬口定源左衛門請口下丸川除	120k(216m)	ならし 10k	0.5k(0.9m)	ならし 2.5k(4.5m)
上馬瀬口定源左衛門請口下丸川除	80k(145m)	10k	5k(9m)	ならし 2k(3.6m)

(注記)「口下」は「太田用水筒口から下流」の意味と考えられる。単位:kは間(1間=1.818m)

表-3 新川郡常願寺川筋御普請所見取絵図にみる川除の規模(1836年)

絵図の川除番号	長さ	鋪(根)	頭	高さ
一	31k(56m)	10k(18m)	6k(11m)	2k(3.6m)
二	135k(245m)	10k(18m)	6k(11m)	2k(3.6m)
三	66k(119m)	3k(5m)	1k(2m)	1k(2m)
四上	180k(327m)	10k(18m)	6k(11m)	2k(3.6m)
四下 太田用水水門まで	80k(145m)	20k(36m)	10k(18m)	2k(3.6m)
太田用水水門より下丁場	250k(455m)	20k(36m)	10k(18m)	2.5k(4.5m)
下		10k(18m)	6k(11m)	2k(3.6m)

表-2より、川除の規模は敷幅18m、高さは3.6mから4.5m位であり、下流の馬瀬口の「佐々堤」の通説、敷幅45m、高さ10mに対して、これらの川除群と洪水対策にバランスを欠くことになる。

当時の川除の強度に対する考え方を高堂文書「満水留」に見ることが出来る。1789年の出水では、金沢藩領上滝前三筋川除と富山藩領の草履田川除の全てと源左衛門請川除が80間(145m)決壊した。そのため、常願寺川左岸の村々や、常願寺川から分流し神通川に流れる込む鮎川筋の村々や富山町にも大被害が発生した。川除の復旧にあたり、金沢・富山両藩で何回か交渉がなされた。富山藩は、「城下へ水がつく大もとは、加賀藩領上滝川除であるから、そこを丈夫に直してくれなければ下流の草履田川除をいくら丈夫にしても相こたい申さず候」と申し入れている²⁶⁾。このような両藩のやり取りから、もし、下流の馬瀬口辺りに通説の高さ10mの「佐々堤」が存在していたら、表-2の規模の川除は、富山藩の主張に相違することになる。従って、「佐々堤」が寛

政年間迄残っていたとしても、上滝前から馬瀬口迄の川除の高さは連続性を考慮して、高さは4m前後だったのではないだろうか。

(3)江戸時代の絵図に見られる川除の規模

十村内山家の絵図「新川郡常願寺川筋御普請所見取絵図」²⁷⁾1836(天保7)年には、上流域の千垣・中地山から河口までの川除の長さ、高さ、鋪幅、頭幅、川除の種類、普請費用の負担(藩、郡役所、村)、河岸の高さ、村の位置等が記されている。(写真-2)

この時代「佐々堤」が存在していたとすれば、左岸の上滝前から馬瀬口迄の範囲に描かれていたことになる。太田用水筒口付近には「大石三方羽鳥丁場」と記述された御納戸(藩直営)丁場の2基の川除がより大きく描かれている。この絵図に書かれた金沢藩と富山藩境の上滝下丁場の小原用水筒口から下流馬瀬口迄の川除の規模を表-3に示す。太田用水筒口の水門周辺が1789年に築造の川除より、敷幅20間(36m)、頭幅 10間(18m)の分厚い構造となっているが、高さは最大で2間5分(4.5m)である。高さ10mの川除は存在せず、既に流失していたか、残っていたとすれば4m前後の高さであったことになる。

1858年の大洪水により埋没した川除の復旧図と考

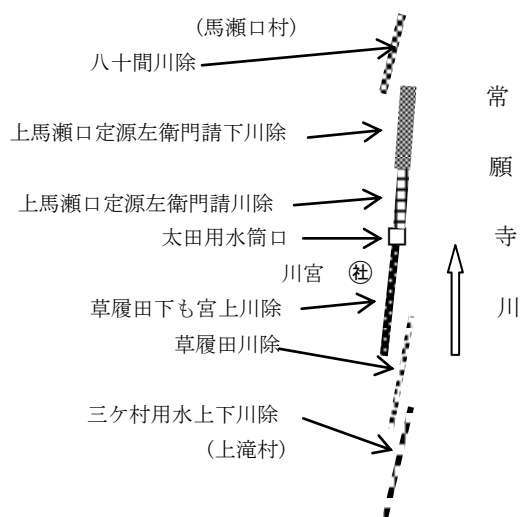


図-2 上滝から馬瀬口にかけての川除(イメージ)
(文献 26)を参考として作成した)



写真-2 馬瀬口付近の川除(1836年)(富山県立図書館蔵)

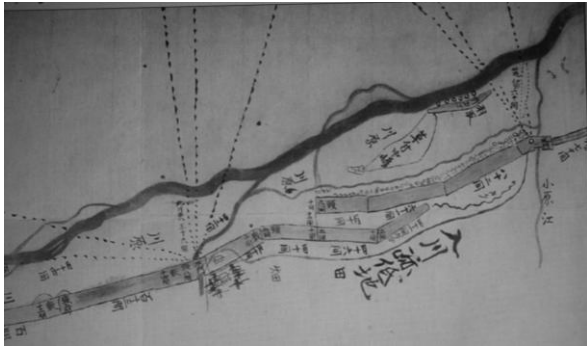


写真-3 清水又用水及び鮎川等の図(富山県立図書館蔵)

えられる、富山県立図書館蔵「清水又用水及び鮎川等の図」(写真-3)には、旧川除より少し川表側に移して造られたと推定される草履田川除、源左衛門川除の配置と敷、頭の寸法が記入されている。

表-3の(一)、(二)、(三)に相当する川除は、敷幅10間、頭幅6間と、ほぼ同一規模に復旧している。(四上)は、敷幅10間、頭幅5間に、(四太田水門)は、敷幅14間、頭幅8間と小さくなっている。太田水門より下は敷幅12間、頭幅8間と、これも小さくなっている。図に川除の高さが記入されていないのは、川除は溢流を前提とし、強さに影響する川除の厚さを重視しているからと推量される。

地元の伝承では、1858年迄、太田用水の取入れ口は現在より、約50m南西方向にある水神碑の位置にあったとされる。かつての川除天端の一部が現在の常西合口用水内にあることが理解でき、「佐々堤」の天端とされているのは、写真-2において「四上」と「四下」の川除に相当すると推定される。

5. まとめ

古絵図と古文書から江戸時代の川除の規模の変遷を具体的に示した。また、「佐々堤」は川岸を護るための「石出し(水制)」か、または鮎川への流量を制限する「洗堰」だった可能性もある。そして、馬瀬口での6回に及ぶ破堤の記録や、大石を三面に張り付けた石堤が造られた江戸時代の文書と絵図が存在することから、現在「佐々堤」の天端とされる石張は、これらの川除の可能性が高いことを指摘した。

「佐々堤」は敷幅45m、天端幅30m、高さ10mの規模であったとする説は、江戸時代の絵図や文書に表された寸法と比較すると、整合性がなく信憑性が低い。また、成政が2kmの範囲にわたり霞堤を造ったとする説は、1581(天正9)年以降は上杉勢との戦に明け暮れていたため、築堤に必要な動員数を計算すると無理がある。

なお、本稿は上滝地区を中心として活動する大山歴史民俗研究会の機関誌「大山の歴史と民俗の会」に投稿した「常願寺川佐々堤について」の一部を再構成して引用している。

謝辞：高堂文書の解説には、富山県公文書館の栄調査員にご協力いただきました。誌上を借りて感謝申

し上げます。

参考文献および補注

- 1) 国土交通省北陸地方整備局：常願寺川水系河川整備計画，p. 50，2000。では、底幅40m，高さ10m，長さ150mとある。
- 2) 大熊孝：霞堤の機能と語源に関する研究，第7回土木史研究発表会論文集，pp. 259-266，1987。
- 3) 寺村淳，大熊孝：北陸扇状地河川における霞堤の変遷とその役割に関する研究，土木史研究論文集vol. 24，pp. 161-171，2005。
- 4) 安達・大塚・北浦：常願寺川・藩政期から明治期の治水，土木史研究第19号，p. 333，土木学会，1999。
- 5) 田邊雄司・越野正史：常願寺川佐々堤調査中間報告，北陸地方建設局管内技術研究会論文集，pp. 337-340，北陸地方建設局，2000。
- 6) 富山測候所編：富山県災異史料，p. 29，1940。
- 7) 新田二郎編；越中資料集成3に所収，前田氏家乗，p. 550，桂書房，1988。
- 8) 富山市市史編纂係：富山市史，p. 8，中田書店，1909。
- 9) 土木学会編：明治以前日本土木史，p. 129，土木学会，1936。
- 10) 富山県立図書館蔵，富山史編纂掛編：富山市史調査材料，発行年不明
- 11) 富山県立図書館蔵，富山史編纂掛編：富山市史編纂顛末，1909。
- 12) 建設省北陸地方建設局：常願寺川沿革誌，p. 97，富山工事事務所，1962。
- 13) 藤井昭二他：常願寺川扇状地の形成と災害についての2, 3の知見，立山カルデラ研究紀要第12号，p. 2，立山カルデラ砂防博物館，2011。
- 14) 常西用水普通水利組合編：常西合口用水誌，p. 2，常西用水普通水利組合，1932。
- 15) 遠藤和子：戦国の遺産・佐々堤，『土と基礎』35-3，pp. 123-126，地盤工学会，1991，および，遠藤和子：佐々成政，p. 194，サイマル出版会，1986。
- 16) 前出4)，p. 333。天端幅については触れていない。
- 17) 大石慎三郎校訂『日本史料選書』(4) 近藤出版社，p. 201，1969に所収の大石久敬原著『地方凡例録』下巻，寛政3年(1791)。
- 18) 国立国会図書館蔵，秋田義一編『算法地方大成』普請之部四，112丁，天保8(1837)。
- 19) 北陸農政局常願寺川沿岸農地防災事業所：越の国は川の道，p. 5，北陸農政局，2006。
- 20) 前出6)，pp. 32-60。
- 21) 前出12)，pp. 494, 548。
- 22) 前出12)，p. 109。
- 23) 富山県公文書館蔵高堂文書「常願寺川縁加賀・富山両藩境川除普請仕法目録など覚」1789(寛政1)年閏6月
- 24) 前出17)，p. 201。
- 25) 中村太一路：満水留の考察(その二)，富山史壇54号，p. 45，越中史壇会，1973。
- 26) 富山県立図書館蔵：常願寺川筋押切の図，1858年
- 27) 富山県立図書館蔵内山文書「新川郡常願寺川筋御普請所見取絵図」，1836(天保7)年。

(2015. 4. 6 受付)